

矢作川下流地域の農業に関する地理学的研究

小玉美意子

〔目的〕 ひとつの地域をとりあげ、その地域性を明らかにしていくのが本研究の目的である。当地は日本に於ける農業の先進地であり、農業が主産業でもあるので、農業を通して他産業をも考察した。

〔第I章 概説〕 名古屋市を中心とする中心とする中京大都市圏に属し、三河湾に面する事、又、矢作川河口に当地が位置する事、これらが工業や農業発達背景となっている。

〔第II章 地形〕 大部分は15m以下の台地及び低地である。洪積層は碧海台地と呼ばれ地域の北西部に存在し、それ以外は沖積地で多くの自然堤防や旧河道を含む。臨海部は干拓地が多い。これらの事柄は農業土地利用と深く結びついている。

〔第III章 農業の現状〕

この地域の一戸当平均農用地面積は7.2反で非常に狭い。この様に狭くさせた原因、又は狭くても生活できる理由は、当地農業が変化に富む事、その結果としての高生産性、商業性という点にある。又、兼業における特殊性も十分考慮に入れねばならない。

〔第IV章 土地利用〕

変化に富む例として、現在の土地利用を示した。畑作にも近郊作物としての蔬菜類が多く、樹園地も果樹や茶に切りかえて生産額の増大をはかり、国民の経済生活の向上と共に花卉栽培を行った。かような多様性は、気候の思慮もさることながら、住民の企業心に負う処が大きい。それを証明する為、断片的ながら土地利用の変遷を書いた。綿花、桑、果樹、茶など時流に即した商品作物をとり入れた事、干拓や河道の変遷という難事を行った事等がそれである。

〔第V章 他産業〕

この地の農業と切っても切れぬ関係の他産業、農業の兼業という立場から見た他産業について述べた。

臨海地域では、農業における生産の頭打ち状態と同じく省略化の結果、労力を漁業に向ける者が多く、最近の生産ののびは著しい。沿岸漁業、浅海養殖、内水面養殖の三種に大別できるが、後者程生産高が上昇している。

本地域産業の特殊な例としての塩田も兼業に占める比重は大である。が、

ここでは、瀬戸内以外のまれな存在として、この塩田を考察した。結果として農業の兼業とうながりが深い事は予期されることである。

比較的有利な自然条件の上に、昔は交通不便が地方的塩田を可能にし、兼業が多く小規模な事が低生産力にもかかわらず塩田を存在させた。最近は大災害が強力な組合組織形成の原因となった。それにも増して強力な背景となったのは、住民の意欲であった。

工業には左来工業が多いが、それから発展して近代工業になったものもある。ガラ紡等は三河の棉花栽培と結びついて発達した農村工業である。ガラ紡のみならず当地の工場は農村内に分布し、農村の余剰労働力を吸収している。

(第七章 まとめ)

以上が本地区の一般的特色であるが、地域内では更に細く分類できる。そこで兼業の種類から地域区分を行った。大きく二つに分けると、純農村と工業又は漁業を兼業とする町村にわけ、その中は、作物又は漁業の種類を指標にして細分を行った。が、この際、字別の統計が得られなかった事は非常に残念である。

厚木市周辺の地理学的考察

青 藤 潔 子

調査地域である神奈川県厚木市は、東京の近郊にあって、都市化の波をいろんな面で感じさせる新興の都市である。

厚木市周辺の地域性をみるにあたり、自然環境として地形を、人文環境として都市化とその影響を2つの主要な観点として、市を構成する各分野を、厚木市誕生後約10年間の変化という形で調査を始めた。都市化を考察する際に、都市化の実態を都市的土地利用の進出という形で、又都市化の影響として、人口構成の変化と、農村的機能要素の後退又は変貌という形でとり扱った。最後に、自然条件、都市化の性格のちがい、農業経営の特徴をもとにして、厚木市域の概括的な地域区分を行なった。

厚木市周辺は東の相模原台地、西の丹沢山地にはさまれた地域で、その間を、南下する相模川の中流部付近に位置する、地域の西縁は、雁行状の断片が、NNWへSSEの方向に配列し、又断層起源と考えられる数河川によって、いくつかの丘陵、台地に、ブロック状に分離されており、広く関東ロームにおおわれている。地形区分する際の手がかりとして、2.5万の地形図、